

1 自己防衛の中に埋もれる「技術屋魂」

年中多忙「業務に追われる毎日」

「技術屋というのは、融通が利かず、頑固で、自分のことしか考えていない」「仕事熱心はよいが、口うるさく、自己主張が強すぎる」

「こだわりが強すぎる。なぜもつと柔軟になれないのか」

などと、技術者は言われる。このように、どうもよく分からないというのが、社長・経営幹部や営業担当者から見た技術者に対する印象であろう。

技術者側からいえば、完璧に仕事をしたいという一念から出たことであるが、これが誤解を生み、しばしば「技術者はなにを考えているのか分からない」という評価につながってしまう。

たいていの職場では、技術者は年中忙しい。会社が好調で注文が多いときは、次々と発

行されるオーダー（製造命令）に追いかける。受注量が少ない時は少ないで、必要ない利益確保のためのコストダウンや競合購買のための書類作りなどの仕事が増える。つまり年中仕事が減らないのである。

十分な思考時間も取れないまま、年中、上司から廻ってくる仕事の処理に追われる。技術者としての充実感とはほど遠い「業務に追われる毎日」といった方が実態に近い。創造性とはほど遠い「処理すべき業務」があまりにも多いのである。

うすうす無理だと承知しながらも、言われるまま納期を約束する。そこから督促される日々が始まる。

そのような状況下では、いきおい「自己防衛的」にならざるをえず、不満が口をついて出る。ひとたび自分の手を離れた文書の内容や発言には責任を取ることになるのであるから、慎重にならざるを得ない。

「自分を守る」なかで見失われる「技術屋魂」

しかし、技術者は誤解を恐れずあえて比較論として言えば、人間同士の駆け引きに生き

る事務屋とか営業屋と呼ばれる他の職種の人に比べると、総じて人間そのものとしては純粋で、感情・感性も素直である。仕事で抜くことが、人事や労務のように相手によって柔軟な解決をしていくのではなく、人間的係わりを超越した自然科学上の真理や、妥協を許さない理論と経験に裏打ちされた工学であるせいであろうか。

技術屋が事務屋と比較されてよく言われるのは、技術屋は、失うべき工学的知識や経験を保持しているから、自分にこだわると、「自分を守る」必要がある。人の言うことより、真理としての知識を大切に、それが判断基準であると。

誰がなんと言おうと、技術者は目前にある与えられた技術的な問題に精一杯正解を出すべく闘っているのである。これを、こだわりとも、頑固ともみられても仕方がない。そんなことに無頓着に課題と真剣に闘う愛すべき存在なのである。

とはいえ、企業や人間のグループの中で、他人と共通の目標に向かって、仕事をスムーズに進めるためには、最低限のコミュニケーションと人間関係が必要である。

自分と自分の作る世界を頑固に守り、孤立して生きていくわけにはいかない。いわゆる「社会的存在」として生きていくことが要求されるが、技術者にとっては、これは必ずしも絶対条件ではない。

大體が社長や役員は、世間や市場を相手にして、物事を成すことができる。技術屋は、技術屋としての仕事熱心のあまり、技術課題の解決という至上命令が優先され、つい発言が頑固で利己的な印象を相手に与えることになる。

このような「技術者の特性」あるいはもつと極端に言えば「技術屋の業」ともいうべきものが、社長・経営幹部に理解して欲しいところではあるが、なかなか理解が得られない。

だが長引く不況の中で自信を失い、先行き不安に悩んでいる社長や経営幹部をして、その不安を共有しながらも自分の存在を明かすことが下手で、とかく「自分の城」を作ったのが技術者である。自分自身を完全燃焼させることができないまま、企業や社会発展の源である本来の「積極的な自分」としての「技術屋魂」を押し殺しているのが技術者の姿だ。ここでは、技術者の生きる証たる「技術屋魂」は暗黒の霧の中に埋もれるがごとく見えなくなっているのである。